

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02719

研究課題名(和文) 機能的に対応するが意味的には対応しないサイン表現の日独比較

研究課題名(英文) A contrastive study of functionally equivalent, but semantically different sign expressions in Japanese and German

研究代表者

西嶋 義憲 (Nishijima, Yoshinori)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20242539

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本とドイツにおいて機能的には対応するが、意味的には対応するとは言えない公共サインに着目し、言語表現に認められる意味上の差異を類型化した上で、その違いの理由を探ることにある。全く異なる意味情報を提供するものを説明するためには、当該社会のコミュニケーションにおいて何が「当たり前」なのか、つまり、何が期待されているのか、その行動原則の違いと関係づける必要がある。本研究では、それぞれの社会で提供されることが期待される意味情報の違いを抽出し、日本語社会とドイツ語社会で「当たり前」とされるコミュニケーション行動の基本的な考え方、情報提供法などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本とドイツの機能としては類似しているが、意味情報に差異が顕著に表れる公共サインの言語表現に焦点を絞って調査を行った。このような表現の分析はこれまで散発的に事例としては取り上げられることはあっても、客観的かつ体系的には分析されてこなかった。そこで、本研究は公共サインの言語表現を用いることにより、フィールドワークにより機能的には対応するが、意味に差異がある表現の収集と分析が客観的かつ体系的な形でできることになった。そこに本研究の意義を認めることができる。

研究成果の概要(英文)：Focusing on public signs that correspond functionally but not semantically in Japan and Germany, this study aims to classify the semantic differences in the linguistic expressions and then to explore the reasons for these differences. In order to explain why completely different semantic information is provided, it is necessary to relate what is "the obvious" in the communication of each society, that is, what is expected to communicate, to the differences in its behavioral principles. In this study, by classifying the semantic differences in the linguistic expressions in functionally corresponding public signs, I extracted the differences in semantic information expected to be provided in each society, and revealed the differences in the ways of thinking in communication between Japanese and German societies.

研究分野：社会言語学

キーワード：サイン表現 機能的対応 意味的不対応 日本語 ドイツ語 言語景観

1. 研究開始当初の背景

意味上対応する日本語と英語もしくはドイツ語の表現を比較すると、傾向として表現視点(視座)に違いがあることに気づく。一般に、英語やドイツ語は事態の起きている場面の外側に置かれた視点から、日本語は事態の生じている場面の内側にある視点から、それぞれ言語化する傾向があると説明される(金谷, 2004; 中村, 2004)。表現における、このような視点の違いを例証するために、従来、文芸作品の原文とその翻訳を取り上げ、対応する表現どうしを比較するという手法がとられてきた(たとえば、池上(2000)における川端康成の小説『雪国』の冒頭文とその英訳・独訳との比較を参照)。比較に翻訳を用いる方法は、たしかに同一内容を表わす表現どうしの対比を可能にするが、方法論上の問題がある(Nishijima, 2010; 2013a; 西嶋, 2014)。その問題を質と量の2つの観点から指摘しておく。質については、起点言語の表現形式による構造的影響(たとえば、直訳調)や訳者による個人差(文体差)を完全に排除することができないという点(上例の『雪国』ではサイデンステッカーによる英訳とベンルによる独訳のみが例示)である。量については、対応する表現が1文のみ任意に取り上げられ、対比されるが、特定のテキスト全体における差異の出現頻度が不問にされてきた点(『雪国』では冒頭文のみの比較)である。

そこで、このような問題点を克服し、より客観的で体系的な比較を可能にするために、筆者は日本語とドイツ語の対応する場面で独立して使用される定型的慣用表現の比較が有効だと考えた。そのような慣用表現として、コミュニケーション行動制御慣用表現と標識・看板表現の2つを利用して、より客観的な比較を目指すことにした。

上記のように、これまで筆者が行ってきた調査は、機能的に対応し、なおかつ、意味がほぼ同じ定型表現の比較が中心であった。ところが、機能に関しては対応するが、伝達される意味情報においてかなり異なる事例が見つかっている。たとえば、エスカレータ前に掲示してある注意書きを例にとると、日本社会では「お乗りの際は手すりにおつかまりください。黄色い線の内側にお立ちください。降りの際はお足元にご注意ください。」などと書かれているが、ドイツ社会では“Benutzung auf eigene Gefahr [ご利用は自己責任で]”と表示されている。このように、エスカレータを利用する際に、日本語では細かく具体的な指示がなされているが、ドイツ語では単に自己責任で使うように述べるのみである。逆に、電車やバスの車内に掲示されている急停車に対する注意喚起では、“Beim Bremsen Griffstange festhalten [ブレーキの際、握り棒につかまること]”や「急停車する事がありますので、ご注意ください」というように、ドイツ語のほうがより具体的に指示が書かれている場合がある。こういった違いは、視点や場面における対人関係配慮などでは説明できない。このような違いはどこから来るのか、これを解明する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、日本とドイツの対応する公共空間に設置されている看板等に印字された言語表現(サイン表現と呼ぶ)を利用して、日独でほぼ同一の機能を果たすと考えられる定型的な言語表現を収集し、その中から意味情報の異なるものを選定した上で、日独において提供される情報がどのように異なるのかを明らかにすることにある。第二に、ほぼ同じ機能を持つにもかかわらず、異なる意味情報が提示されるのはなぜか、その理由を考察しようとするものである。この作業を通じて、日独それぞれの社会の対応する場面において期待される行動の違いを明らかにすることが可能になるはずである。

3. 研究の方法

本研究の目的は、日本とドイツの対応する公共空間に設置されている看板などのサイン表現に着目し、日独でほぼ同一の機能を果たすと考えられる定型的な言語表現をフィールドワークにより収集し、その中から意味情報の異なるものを選定し、日独において提供される情報がどのように異なるのかを明らかにした上で、その理由を考察することにある。

平成29年(2017年)度は、機能的に対応するが、意味的に異なるものの対照研究のための基本的な枠組みを設定し、それに基づいて日本語資料の収集と分類を行った。平成30年(2018年)度は、対応するドイツ語資料の収集と分類を実施した。最終年度の平成31年(2019年)度は、日独の対照が中心となった。そして、その成果を関連する学会、とりわけ国際学会で発表する。そこでの議論を基に、論文としてまとめ、学会誌や紀要へ投稿していく予定であった。しかしながら、2019年に始まったコロナ禍(Covid-19)により、学会が開催されず、研究発表によって他の研究者と議論する機会がほとんどなくなった。そのため、研究期間を延長し、学会が開催されるのを待った。その間、オンラインによる発表を続け、2023年3月に終了した。

4. 研究成果

本研究では、まず、日本社会とドイツ社会の機能的に対応する公共空間で言語化される定型的な言語表現を、日常的に目にする看板などに記される言語表現(サイン表現)をフィールドワークを通して収集した。サイン表現として収集するデータは、公共場面に見られる看板に書かれた

定型表現に限定した。定型化された言語表現は、一般に不特定多数の人々が利用する公共空間（道路、公園、小売店などの店舗、観光施設など）と、もっぱら特定の人たちが利用する空間（学校、大学、教会など）に分けることができる。収集された定型化された慣用表現のうち、意味情報の異なるものに焦点をあて、それをさらに分類する。それらは、大きく分けると、機能的には対応するが、意味情報に関しては具体性や明示性のレベルで異なるもの、まったく異なる意味情報を提供するものの2種類に分類される。前者については、その1部をすでに分析・分類している。しかし、後者の全く異なる意味情報を提供するものについては、従来の視点や待遇という観点からでは十分に説明できない。それを説明するためには、当該社会のコミュニケーションにおいては何が「当たり前」なのか、つまり、何が期待されているのか、その行動原則の違いと関係づける必要がある。本研究では、機能的には同じサイン表現の異なる意味情報を類型化することにより、それぞれの社会で期待される意味情報の違いを抽出することができた。そして、この違いに基づいて、日本語社会とドイツ語社会で「当たり前」とされるコミュニケーション行動の基本的な考え方、情報提供法の違いなどを明らかにした。

本報告では、機能的には対応するが、意味的には対応しないサインの背景を考察するために、機能的には対応する場面で一方しかサインが見られない例を取り上げ、それに関連する言語表現と結び付けてその理由を考察する。

日本とドイツにおいて、機能的には対応するが、意味的に異なる表現が見られるサインの例としてエスカレータ付近に見られる注意喚起のサインがある。上記のように、ドイツで見られるサインには“Benutzung auf eigene Gefahr [ご利用は危険を承知のうえで(自己責任で)]”と表記されているにすぎないが、日本の対応する場面では「手すりにおつかまり下さい」「黄色い線の内側にお立ちください」など具体的な注意事項がサインに書かれてある。この相違を考える際、対応する場面で日本にのみサインが見られる場合を考えるとヒントになる。

たとえば、日本の電車のドアには必ず「指づめ注意」「とびらに注意」「開くドアにご注意」といったように、ドアが開く際に戸袋に指が挟まれるのを注意するステッカーが見られるが、ドイツではそのような表示のステッカーは目にしたことがない。また、駅で電車が入線する際、ホームで電車を待っている乗客に注意を促す「白線の内側までさがってお待ちください」などのサインやアナウンスもドイツではほとんど見られないし聞こえない。こういった注意事項は、ドイツでは能力のある大人ならば自分で考え、判断することができ、自ら注意しながら行動するのが自明のことと見なされているために、ドイツでは対応するサインがないのが普通である。こういった点を意識すると、電車のホームでは、「電車が来ます。ご注意ください」「ドアが閉まります。ご注意ください」「電車が出ます。ご注意ください」といったように、こと細かに注意喚起のアナウンスが流れていることに改めて気づく。これらの注意は、常識のある大人には自明事、分かり切ったことである。このようなことは、肯定的に捉えれば「転ばぬ先の杖」のように親切心から来るとも、「おもてなし」という気配り文化が背景にあると考えることもできる。しかしながら、あれこれと指図しているわけだから、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を引き合いに出せば、ネガティブ・フェイス (negative face) の侵害にあたる可能性がある。ここで、Brown & Levinson (1987) の“negative face”の規定“the wants of every ‘competent adult member’ that his actions be unimpeded by others”を考察してみよう。この規定にある‘competent adult member’[能力のある大人のメンバー]という表現に注目したい。この欧米のポライトネス理論では、通常、能力のある大人ならば他者からの指図は好ましくなく、否定的に取られかねないことを意味する。そのため、ドイツではそのような注意は大人に対しては基本的に発せられない。日本社会に典型的に見られる、こういったこまごまとした注意喚起は、ドイツ社会から見ると、大人が子供に対して注意している光景を思い起こさせるものと言える。

このように、対応する場面での意味内容の違いもしくは対応する表現の有無は、期待される行動原則の違いにその理由が求められることがわかった。

さらに本研究では、機能的に対応する場面、意味的に対応しないサインの他の例として、とくに車ステッカーと「研修中」タグについて触れておきたい。対応する場面で見られる様々な看板などの公共サインを収集していると、移動体にも様々な文字表記が見られることに気づく。たとえば、車の後部に貼られるステッカー、コンビニやスーパーマーケットの店員の胸元につけられている「研修中」「アルバイト」などのタグである。これらは広義に捉えれば言語景観の一部を構成していると言えるだろう。しかしながら、このようなステッカーやタグはドイツではほとんど目にすることはない。とするなら、これらは日本の言語景観の特徴的な一部を構成していると思えることができるだろう。このような観点から、言語景観の対象を拡張する分析も実施した。

研究成果の詳細は、公表されている論文、著書、学会発表を参照のこと。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 What is Expected of Clerks Wearing “ In Training ” Tags? Analyzing the Tag Roles	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Studies	6. 最初と最後の頁 146-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 43(2)
2. 論文標題 Stickers on the Rear of Vehicles as Linguistic Landscapes: Analysis from a Stylistic Point of View	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢大学経済論集	6. 最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00069145	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 68
2. 論文標題 言語景観としての車ステッカーのスタイル	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文体論研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00065781	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 27
2. 論文標題 カフカの『隣り村』における「主観」世界と「事実」世界 『木々』との構造的類似性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00069452	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本大地・岩田一成・栗原唯・西嶋義憲	4. 巻 56
2. 論文標題 シンポジウム報告：公共空間における言語使用 日本語、フランス語、ドイツ語の公共サインを事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フランス語学研究	6. 最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 "Irassyaimase" as an Unreplyable Utterance in Japanese: Analysis of Ostensible Hospitality	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Studies	6. 最初と最後の頁 84-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 25
2. 論文標題 カフカ作品における「唐突発言」 『不幸であること』における幽霊との会話の分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 127-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00061567	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 A Contrastive Study of Functionally Equivalent, but Semantically Different Sign Expressions in Japanese and German: An Analysis of Preferred Expression Styles	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Studies	6. 最初と最後の頁 152-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 24
2. 論文標題 カフカの『判決』における連続する「お見通し発言」 思考動詞のスコープの解釈をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 77-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00057384	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 Preferred Facing Directions of Pictures: A Comparison of Traffic Signs in Japan and Germany	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Studies	6. 最初と最後の頁 115-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 23
2. 論文標題 "Seeing-through utterance" as Wordplay: Interpersonal Games in Fictional Conversation of Franz Kafka	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00053895	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 A Contrastive Study of Functionally Equivalent, but Semantically Different Sign Expressions in Japanese and German: An Analysis of Preferred Expression Styles	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Intercultural Communication Studies	6. 最初と最後の頁 152-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 22
2. 論文標題 カフカのテキスト Eine kaiserliche Botschaft の構造 文芸技法の言語学的分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 57-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00050503	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西嶋義憲	4. 巻 21 (1)
2. 論文標題 機能的に等価な日独対応表現の比較 比較の合理性をめぐる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.21.1_175	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Yoshinori NISHIJIMA
2. 発表標題 Car-stickers on Rear Windows: An Analysis from a Point of View of Linguistic Landscape
3. 学会等名 The 3rd International Conference on Sociolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshinori NISHIJIMA
2. 発表標題 What is Expected of the Clerks by Wearing "In-training" Tags?: An Analysis of Roles of the Tags
3. 学会等名 The 27th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshinori NISHIJIMA
2. 発表標題 Public Signs in Japan as a Sustainable Society: A Sociolinguistic Analysis
3. 学会等名 16th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西嶋義憲
2. 発表標題 言語景観としての車のステッカー ドライバーは何を伝えようとしているのか
3. 学会等名 国際都市言語学会第18回年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西嶋義憲
2. 発表標題 公共サインを言語間比較に使う
3. 学会等名 日本フランス語学会2021年度シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshinori Nishijima, Jung-ah Choi, Sumi Yoon, and Dongling Zhao
2. 発表標題 Gender Differences in Hand Gestures in Disagreement: A Contrastive Analysis of Chinese, Korean, and Japanese
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshinori Nishijima
2. 発表標題 "Unreplyable" Utterances: An Analysis of Omotenashi-expressions in Japanese
3. 学会等名 The 25th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshinori Nishijima
2. 発表標題 A Contrastive Study of Functionally Equivalent, but Semantically Different Sign Expressions in Japanese and German: An Analysis of Preferred Expression Styles
3. 学会等名 The 24th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshinori NISHIJIMA
2. 発表標題 Young People are Getting More Polite: Change in Use of Evaluating Concepts of Communicative Behavior in Japanese and German
3. 学会等名 The 14th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西嶋義憲
2. 発表標題 機能的には対応するが、意味情報の異なるサイン表現の日独比較 期待される表現スタイルの違い
3. 学会等名 日本文体論学会第112回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshinori NISHIJIMA
2. 発表標題 Preferred Facing Direction of Pictures:A Comparison of Traffic Signs in Japan and Germany
3. 学会等名 The 23rd International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 Soumya Sankar Ghosh, Debanjali Roy, Tanmoy Putatunda, and Nilanjan Ray (eds.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Apple Academic Press	5. 総ページ数 277
3. 書名 Language and Cross-Cultural Communication in Travel and Tourism: Strategic Adaptations	

1. 著者名 Carola Hommerich and Masato Kimura (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 上智大学出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 Sustainability in a Fragile World: Approaches from Germany and Japan	

1. 著者名 Yoshinori Nishijima	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 155
3. 書名 A Linguistic Analysis of Fictional Conversations in Kafka's Works	

1. 著者名 Tamilla Mammadova (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 285
3. 書名 Cultural Diversity in Cross-Cultural Settings: A Global Approach	

1. 著者名 Gisela Trommsdorff, Hans-Joachim Kornadt, and Carmen Schmidt (Hgg.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Pabst Science Publishers	5. 総ページ数 423
3. 書名 Sozialer Wandel in Deutschland und Japan: 30 Jahre Deutsch-Japanische Gesellschaft fuer Sozialwissenschaften	

1. 著者名 林寄伸二, 村上浩明編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ネクストパブリッシング	5. 総ページ数 265
3. 書名 カフカの長編小説	

1. 著者名 Carmen Schmidt and Ralf Kleinfeld (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 489
3. 書名 The Crisis of Democracy? Chances, Risks and Challenges in Japan (Asia) and Germany (Europe)	

1. 著者名 中村芳久教授退職記念論文集刊行会編(共著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 528
3. 書名 ことばのバースペクティヴ	

1. 著者名 Makoto KOBAYASHI, Gisela TROMMSDORFF & Carola HOMMERICH (eds.) (共著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Deutsch-Japanische Gesellschaft fuer Sozialwissenschaften	5. 総ページ数 418
3. 書名 Trust and Risks in Changing Societies (Proceedings of the 13th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------